

<総評>

言葉によって生まれる非日常の取り合わせは詩歌全般が得意とするところですが、定型に捉われない口語詩句では、その幅がグンと広がります。今月はそういうことを考えながら選んでみました。

煎餅の箱をたゆませ独楽回る

---

長谷川柊香 宮城県

——回ることで独楽がたゆませているのは箱で、その箱は煎餅の箱である。煎餅の箱をたゆませることで独楽は回っている。因果関係の順と逆が響き合う面白さ。

600Wで温めてしまうとき

まず温もりを失う手料理

---

旭日 百 滋賀県

——電子レンジで熱する温度と“手料理の温もり”の温度は、同じ温度でも違うという発見または意見。冷房 25 度と暖房 25 度は違うか。

おにゆりの花へしゃがめば

濡れながら

ひかりを放つ蝶のりんぷん

---

さいう 愛知県

——しゃがむのは作者か蝶か。その瞬間、作者は蝶になっているのかも知れない。華麗なイメージの作品。

運命の順にしら梅つぼみあく

---

自見 旅人 東京都

——花が開く。順序もあらかじめ定められているように粛々と。自然の厳粛さ。

最期の最期まで

言葉が足りない人だった

---

ビスコ 愛知県

——言うべきことを言わずまたは言えず終わってしまう。そういう所在ない人生がある。言葉は足りず、しかし心は余っていたのか。

朝寝坊して暴動の日を延ばす

---

吉富 快斗 埼玉県

——暴動などという重大なことも、朝寝坊という日常のできごとに逆らえないことがある。歴史にも人生にもある可笑しみ。

タオルケットが

闇からすっと降りてくる

昔話とつくにこと切れている

---

からすまあ 神奈川県

——いつもの昔話が繰り返されて、いつもの眠りの幕が下りてくる。それがタオルケットという温かさがうれしい。

電車走る

風景流れる

母の膝の上の子の

手元で絵本捲られ

また、風景流れる

---

小沢旭 山梨県

——視線の目まぐるしい移動で電車のスピードまで感じられる。私たちはこんな目の使い方をしているのだ。

パエリアの

パは

春を待つタイプの

パ

---

山本先生 東京都

——破裂音「パ」は呼気を急に解放して発する音。口をあけ放つ明るい母音と連れ立って春を呼ぶ。

今朝の冬半透明の黄の付箋

---

吉沢 美香 宮城県

——今朝に特定された“冬”は薄黄色で半透明という儚さ。俳句ならではの一瞬のかそけさの感覚。

私が解けた、

先っちょを

ひるのひかりが見つめます

---

こはくいろ 大阪府

—氷柱でしょうか。朝は厳しいが昼はぬるむ光の遠慮ないまなざし。

観音の

口にいちごを捻り込み

如来になりゆく姫の両眼

---

マズルカ 山口県

—色々な想像が働く面白い句です。アルカイックスマイルの観音の受け口。そこにいちごを捻じり込むという。上から目線の媼はもう如来。如来は観音より位が上ですからね。

妖精の絵文字が不意に飛び出す

ああ、コロナ陽性だったのか

---

加藤 万結子 愛知県

—絵文字の婉曲的な使い方はいかにも日本の風景。

南館の

便器のレバーは

冷たくて

ぐおんぐおんと宇宙は広い

---

真島しましま 千葉県

—排泄という行為のせいかもしれないが、便器に吸い込まれる水の音は底知れない感じがします。果てしない宇宙との取り合わせが官能的。

少女が電話をしながら

爪を眺める行為に名前をつけて

---

真島しましま 千葉県

——みんなしますね、この仕草。世界は言葉以外のメッセージであふれています。